

## 2 Y児の姿を通して（3～4歳児）

高本 洋 西多 由貴江

Y児は背も大きく、言葉もしっかりしている。入園当初から身の回りの始末や着替えなども教師が手を貸さなくても自分できちんと行っている幼児であった。1学期中頃になると、母親からなかなか離れることができず、泣きながら登園するようになった。園内では教師がいつも一緒にいないと不安な様子をみせ、保育中のほとんどの時間を教師の側で過ごすようになった。Y児は教師が「やってみよう」と誘うことはやろうとするが、自分から興味をもってかかわろうとしたり、やってみようとしたり姿がほとんど見られなかった。そんなY児の姿が気になっていた。

2学期になると、1学期以上に母親と離れられず、大声で泣くようになった。そこで、母親にも保育室の中に入ってもらい、一緒に過ごしてもらうことにしたが、母親と一緒に何かをして遊ぶというよりも、Y児がしていることを母親がそばで見ながら声をかけ合い、存在を確かめているように感じた。

そんなY児が、安心して教師や友達と生活することができるようになってほしい、また、自分から興味をもってかかわろうとしたり、できなくてもやってみようとしたりする気持ちをもってほしいと願い、Y児の姿を追っていきたいと考えた。

### 事例1「ママが見ているから大丈夫なの」 9月6日（月）3歳 うさぎ組

Y児がいつものように母親と一緒に保育室まで登園してきた。母親と一緒に登園時の活動に取り組んだ後、製作コーナーで母親の隣に座り絵をかき始めた。母親は何も言わず、Y児を見ていた。教師はその様子を少し離れた場所で見ながら、他の幼児と一緒に遊んでいた。しばらくすると突然、Y児が教師に話しかけてきた。

Y児 「先生、砂遊びしてもいいですか」

教師 「いいよ」

Y児 「お外行ってきます」

砂場には誰も出ていなかったが、一人で外に出かけていった。母親はテラスで砂場が見える場所に座り、Y児の姿を見ていた。Y児は「ママ、見て」と声をかけながら、穴を掘ったり、山をつくったりして、自分のやっていることを母親に伝えながら過ごしていた。母親は、その様子をにこにこしながら見ている。

しばらくするとM児、N児、O児、P児らが、砂場に出てケーキをつくったり、山をつくったりして遊び始めた。教師もその仲間に加わって楽しんでいた。

すると、Y児の方から「ママが見ているから大丈夫なの」と、教師に声をかけてきた。

### ○Y児の学び

- ・母親がいると心配ない。
- ・母親がいると砂場で遊ぶことができる

### ○教師の学び

- ・Y児は常に母親の存在を感じていないと遊ぶことができない。母親もY児の様子が気になり、離れられないでいる。
- ・Y児は自分のことで精一杯で、友達の様子は関係ない。

### ○今後に向けて

- ・まずはY児が安心して生活できるようになるために、寄り添っていく。
- ・母親がそばにいないでも、教師や友達とかかわっていけるように、様々なかかわり方があることを伝えていく。
- ・母親にも、Y児を心配しすぎないように伝えていく。

#### 事例2 「そんなのダメだよ。ちゃんとやらなきゃ」

11月16日(火)

11月になると、母親と離れて一人で保育室に入ってくるようになったが、今にも泣き出そうなので、教師に救いを求めにくる姿は変わらなかった。

そんなある日のことである。この日もY児は製作コーナーで教師の隣に座り、小さな空き箱の中に紙を小さく切って入れていた。

Y児 「ママのおみやげつくるの」

教師 「お母さん、喜ぶよ。たくさんつくろうね」

Y児 「うん」

と、箱を組み合わせたり、絵を描いたりしていた。教師が側を離れようとする、「あ〜」と、泣きそうな顔で教師の手を握り離そうとしない。そこにQ児が近づいてきた。そのとたん、Y児の表情は硬くなった。Q児が教師の背中から抱きつき、ほっぺにキスをしたり、鼻をなめようとしたりしてきた。教師が「やめて」といいながらも、しばらく、Q児のかかわりを受け止め、互いにスキンシップを楽しんでいた。

Y児 「そんなの、ダメだよ。ちゃんとやらなきゃ」

Q児 「……」

その後、Q児がY児を押した。Y児は泣き出してしまった。

その日からQ児が近づいてくるだけで泣きだすようになった。

#### ○Y児の学び

- ・お母さんが好きなことを教師も認めてくれている。
- ・Q児は教師が「やめて」っていつているのに止めないダメな子だ。
- ・Q児は嫌なことをする怖い子だ。

#### ○教師の学び

- ・Y児は善悪の判断をもっているが、友達とのかかわりの中で、通じないことがあることを感じている。その中でストレスを感じている。
- ・Y児はQ児のように体全体で表現してくる友達の存在を怖いと感じている。
- ・Y児は「やめて」の言葉だけで判断してしまい、その場の雰囲気や教師や友達の表情を見て判断することができない幼児である。

#### ○今後に向けて

- ・引き続き、Y児が安心して生活できるように寄り添っていく。
- ・男の子は怖くないことを伝えていく。
- ・スキンシップをとったり、じゃれ合ったりする楽しさがあることを伝えていく。

#### 事例3 「これぐらいは大丈夫です」

1月25日(火)

保育室でR児、S児、T児、H教師らが上に乗ったり、押し合ったり、くすぐり合ったりしながら楽しんでいた。Y児ら数人も側に立って笑いながらH教師達の姿を見ていた。

H教師が仰向けになった時、S児がお腹の上に乗るかかってきた。側にいたR児、T児らもH教師の上に乗った。

H教師 「Y児ちゃんも乗る？」

Y児 「うん」

嬉しそうにY児からH教師の上に乗っていった。H教師が動くと幼児らも動く、その状況を楽しんでいた。Y児も声を出して笑いながら楽しんでいた。

その様子に誘われて、まわりで見ていた2、3人の幼児もH教師の上に乗っかってきた。すると幼児らはバランスを崩し倒れてしまった。Y児は他の幼児の下になった。Y児は苦笑いしながら立ち上がったが、男の子がY児の上に乗るのは初めてのことで、どうするか心配で、声をかけた。

H教師 「大丈夫？」

Y児 「これぐらいは大丈夫です」

その後もR児、S児、H教師らはじゃれあっていた。Y児はH教師の上に乗ることはしなかったが、ずっとその場で楽しそうに笑いながらその様子を見て、その場の雰囲気を楽しんでいた。

#### ○Y児の学び

- ・ H教師と一緒に遊んだら楽しい。
- ・ H教師と一緒に遊んでいたら友達もかかわってくる。
- ・ 教師や友達と一緒に遊ぶときには痛い思いをすることもあるが、少しぐらいのことは我慢できる。
- ・ H教師は私を守ってくれるから安心だ。

#### ○教師の学び

- ・ Y児は男の子達のじゃれあいを笑って見ることができるようになった。
- ・ Y児は自分から遊びに加わることはできないが、一緒に遊びたいという思いをもっている。
- ・ Y児とH教師の信頼関係ができている。
- ・ 教師から積極的に遊びに誘うことが必要な幼児がいる。

#### ○今後に向けて

Y児は、教師や友達が楽しそうにしている雰囲気を感じることができるようになった。また、触れ合って遊ぶことは楽しい、おもしろいと思うことができるようになってきた。しかし、体でかかわっていくことが少ない。だからこそ、このようなかかわりを積み重ねていく必要がある。頭で考える前に教師からかかわり、教師や友達と触れ合って遊ぶ楽しさを感じることができるよう援助していかなければならない。

また、H教師のような男性教諭の役割は重要である。思いっきり体でかかわり合う経験を積み重ねていくことが大切である。

#### 事例4 「それは近すぎるよお」

4月15日（金）4歳 すみれ組

Y児、P児、U児、V児、M児らが、チューリップの花壇のあたりを散歩していた。ボールが一つ転がっているのを見つけ、P児が言った。

P児 「サッカーしよう！」

M児 「うん、やろう」

P児とM児がボールを蹴り出した。つられるようにU児もボールを追いかけた。Y児とV児はみんながボールを追いかける様子を眺めていた。

しばらくその場に立ち止まったままだったので、教師が少し離れたところに転がっていたボールを2つ、2人の足元に転がした。それに気づいた2人は、うれしそうにボールを一つずつ手にもった。

早速V児がゴールから50cmほど離れた場所にボールを置いた。

V児 「えいっ」

ボールをけり、シュートが決まった。

V児 「やったあ、はいたよ。」

Y児 「それは近すぎるよお」

V児 「へへえ」



2人とも笑顔で話をしながら、ボールを手にもち、歩き出した。M児、U児もいつの間にかボールをもっていた。5人がボールを一人一つずつ手にもち、それぞれがついたり、蹴ったり、ゴールネットの上にひっかけたりして楽しんでいた。Y児も、蹴ることはしなかったが、ネットの上に引っかけたりして楽しんでいた。

#### ○Y児の学び

- ・友達と一緒に遊んだら楽しい。
- ・先生がボールを転がしてくれてうれしかった。

#### ○教師の学び

- ・Y児は友達と一緒に遊んでいると、よくしゃべるし、笑顔も多い。
- ・P児が遊びをリードすることが多い。
- ・Y児は友達に対して評価はするが、自分でやってみようとはしない。
- ・物を与えることも個によっては必要であり、よき援助である。

#### ○今後に向けて

教師が転がしたボールをY児はうれしそうに手にした。教師の“あなたたちもサッカーすればいいよ”というメッセージを受け取ったと捉えている。しかし、V児はすぐ真似してボールを蹴ったが、Y児は見ていただけだった。言葉では参加しているが、実際に自分で蹴ってみることはしていない。今後、Y児が体を動かしたくなるような援助を心がけていきたい。

遊びの時間、Y児はU児と2人でテラスのろくぼく前で、組み立てられたマルチパネに登って遊んでいた。そこへ教師が通りかかると、

Y児 「にゃおーん、先生についてY児ますう」

U児 「にゃん、にゃん」

と言いながら教師の後についてきた。教師もネコに変身し、プレールームを1周したあと、マットを出して、寝転んだ。

教師 「なんだか眠くなってきたにゃあ・・・むにゃむにゃ」

Y児 「ねむいにゃあ」

Y児もそう言いながら教師の横に寝転がった。続いてU児も寝転がってきた。

教師 「むにゃむにゃ、せんせいネコは寝相が悪いのだ」

そう言いながら転がり、Y児にぶつかった。Y児も笑いながら転がってU児にぶつかった。U児も笑いながらY児にぶつかり返してきた。さらに教師は転がりながら2人並んで寝ている上を越えていった。

Y児 「重いよお」

そう言いながらも笑っていたので、転がり続けた。何度か転がった後、

教師 「ごめんだにゃあ。重かったにええ。なんだかお腹がすいてきたにゃあ」

Y児 「にゃおーん、お魚ほしいよお」

教師 「そうだねえ、お魚食べたいねえ・・・。  
あっ、あそこにあんな大きな魚が！」

Y児 「ほんとだ。いこうよお。」

年長組が壁面に飾ってあった大きなこいのぼりをめがけ、走っていった。Y児とU児はうれしそうにこいのぼりを食べる真似をしていた。



### ○Y児の学び

- ・先生と一緒に猫になってくれてうれしい。
- ・先生ネコは寝相が悪いなあ。
- ・先生や友達と体をくっつけて遊ぶと楽しい。
- ・プレールームには大きな魚（こいのぼり）がいた。

### ○教師の学び

- ・Y児も体をぶつけ合ったり、なりきって遊んだりすることを楽しむことができる。
- ・教師も体ごとスキンシップをしながら、なりきって一緒に遊ぶことが大事であることを実感した。
- ・Y児はネコのエサは魚だと思っている。

### ○今後に向けて

教師と一緒に遊ぶことで、Y児がイメージをもって遊びを楽しむことができている。今後も一緒に遊びながら、イメージをもたせたり、手本になったりしていきたい。加えて、体をぶつけ合うような遊びや活動も、体だけではなく心もほぐす効果がありそうなので、どんどん仕組んでいきたい。また「むにゃむにゃ」「にゃー」といった言葉を発しながら言葉を教えていくことで言語感覚も磨くことができそうだ。教師も意識して五感を磨く言葉を発していくことが大切であると感じた。

#### 事例6-①「足がチクチクするの・・・」

5月17日（火）

Y児はこれまで、自分から進んで裸足になることはほとんどなかった。教師の言葉かけでようやくズックと靴下を脱ぐことが何度かあったが、声をかけなければズックを履いたままだった。この日は、教師の声かけで、裸足になって遊んでいた。

園庭で、かかとからそうっと地面に足を下ろしながら歩くY児の姿が目にとまった。

教師 「Y児ちゃんどうしたの？」

Y児 「ん？」

Y児が顔を上げた。

教師 「Y児ちゃん、下向いてたけど、どうかした？」

Y児 「・・・・足がチクチクするの・・・」

教師 「チクチクするの？」

Y児 「うん。どうしてかなあ・・・」

Y児は不思議そうに足元を見ていた。

Y児 「何も落ちていないよねえ」

教師 「そうだねえ。」

Y児 「・・・・・・・・」

(足元をずっとみまわしている)

教師 「Y児ちゃん、一つ落ちているものあるよ」

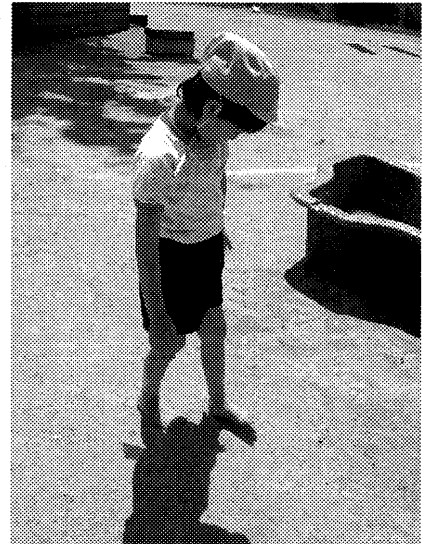
Y児 「えっ、何？」

教師 「それはね・・・砂！」

Y児 「えー、あたりまえだよお」

教師 「そう、当たり前なの。でも、Y児ちゃんは今日、そのあたり前に気づいたの。すごいね、裸足になったおかげだね。」

Y児 「ふーん、そうかあ」



そう言いながらY児は、また足元を見つめた。そして、顔を上げると、うれしそうに走って行った。

#### ○Y児の学び

- ・裸足で地面（砂の上）を歩くとチクチクする。
- ・裸足になると新しい発見があるんだ。
- ・裸足は不思議だ。

#### ○教師の学び

- ・Y児は裸足になって砂の感触を感じることが出来た。
- ・この日の体験が、Y児にとって、今後裸足になって遊ぶきっかけになりそうだ。

#### 事例6-②「くすぐったいよお」

6月15日（水）

6月中は天気がよく、外で遊ぶ日が多かった。Y児も自分から進んで裸足になり、友達と一緒に泥や水、草花など自然にかかわって遊ぶ姿が見られるようになってきた。

この日も遊びの時間は裸足になり、U児と一緒に図鑑を手にもち、虫を探したり草花を摘んだりしていた。

Y児 「先生、これもってて！」



そう言うと言教師にシロツメグサを手渡した。

Y児 「向こうにピンクのかわいい花があったからとってくるね」

教師 「うん、いってらっしゃい」

そう言うと言教師を駆け上がった。Y児の後からU児も築山を駆け上がった。

Y児 「くすぐったいよお」

教師 「草が伸びてきたなあ」

Y児 「草がいっぱいだね」

U児 「うん」

Y児 「でもフカフカして気持ちいいよ」



そう言うと言、ニコニコしながら花を摘みに走って行った。

#### ○Y児の学び

- ・草はくすぐったいなあ。
- ・踏みつけられた草の上はフカフカして気持ちいいなあ。
- ・草の上を裸足で走っても平気だ。

#### ○教師の学び

- ・Y児は裸足になったことで、草の感触をからだで感じる事ができている。
- ・Y児は感じたことを素直に言葉にしている。
- ・裸足になることで、Y児の体の動きが軽やかになってきている。

#### ○今後に向けて

- ・Y児には今後も裸足でいろいろな感触を味わわせたい。新しい感触（気づき）を楽しんでいる様子もうかがえるので、その気づきに教師も共感していきたい。

#### 事例7「わっ！」

6月28日（火）

Y児、U児、X児、W児らが、段ボールでカタツムリの家をつくっていた。W児が、「水でぬれているところをカタツムリが通る」ことを発見し、水を含ませたティッシュで段ボール上をぬらして道をつくり始めた。X児とY児も水を含ませたティッシュでどんどん段ボールをぬらしていった。かたつむりがそのぬれたコースをのんびり歩いている。カタツムリが坂を登り始めた時、X児が早く登らせようと、カタツムリの尾をつついた。カタツムリがキュッと体を縮ませた。

W児 「びっくりしてるよ」

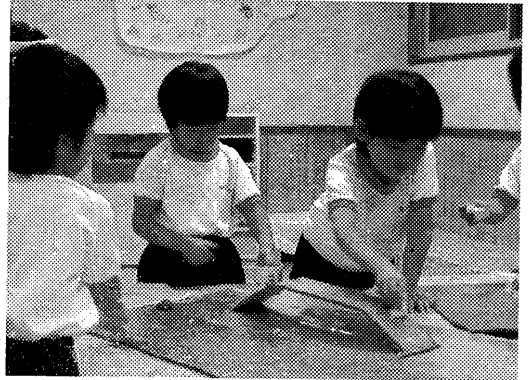
X児 「いいの！」

カタツムリが縮まった姿に興味をもったのか、Y児はおそるおそる手を伸ばし、カタツムリの尾に触れてみた。

Y児 「ぬるぬるするねえ」

Y児は撫でながら、にこにこうれしそうに言った。

U児 「ほんとだ」



U児もY児と同じように触れてみた。Y児、U児、X児の3人に交代に撫でられながら、カタツムリは坂を登っていった。登っているうちにだんだん端っこに寄ってきて、今にも落ちそうになった。X児がカタツムリを持ち上げようとする、W児が「無理矢理さわっちゃだめだよ」と諫めた。その言葉で、一同はカタツムリの行く末を見守ることにした。Y児をはじめ、みんなカタツムリをじっと見ている。教師はこの雰囲気大切にしたいと思い、一緒に見守ることにした。カタツムリは頭をグンと伸ばして、体半分が浮いている状態になってきた。Y児は食い入るようにその様子を見ている。体を何度か左右に振った次の瞬間、体の向きをグイッと変え、Y児の方に顔を向けた。

Y児 「わっ！」

Y児は目を丸くしてびっくりした表情でつぶやいた。その後、にこにこしながら、

Y児 「戻って来ちゃった・・・」

X児 「あははは・・・」



その後もみんなでカタツムリの散歩を見守っていた。

### ○Y児の学び

- ・カタツムリは水気のあるところを歩く。
- ・カタツムリは触るとキュッとちぢまる。
- ・カタツムリの体はぬるぬるしている。
- ・カタツムリは段ボールのへりのような場所でも落ちずに歩くことができる。

- ・W児はカタツムリの気持ちを考えているよ。

#### ○教師の学び

- ・Y児は興味をもったことに自分からかかわったり試したりしている。
- ・カタツムリが急に向きを変えたときにびっくりするくらい集中してカタツムリを見ていたんだ。

#### ○今後に向けて

この事例では、教師は一貫して見守る立場をとった。そのことで、Y児は自分で感触を味わったり、驚いたりすることが出来た。しかし、そのときのY児の言葉に対して教師が共感することができなかった。もっとY児の気持ちにより添い、頷いたり共感したりする援助が必要であったと反省している。また、X児とW児が言葉にやりとりをしているときのY児の表情なども、見逃していたので、もっと表情も見ていかなければいけないと感じた。

#### 事例8-①「この土かたいよお」

7月5日（火）

Y児、P児、U児らが藤棚の下で、赤土を使ってクッキーづくりをしていた。昨日、新しく黒土を入れたところだったので、教師から誘いかけてみた。

- 教師 「こちらに新しい材料があるので、使ってみませんか？」  
P児 「えっ、何？」  
教師 「チョコレートクッキーの材料になります」  
P児 「えっ、どこ？」  
Y児 「わっ、ほんとにチョコレートの色だあ」

そんな会話をしながら、みんないつの間にか黒土を手にしていた。

- Y児 「この土かたいよお」  
U児 「かたいね」  
P児 「水つけてみようっと」

3人は近くに貯まっていた水をつけながら握りだした。

- Y児 「うわー、ぬるぬるするねえ」  
P児 「手がベトベト！」



うれしそうにそんな言葉を発しながら、しばらくそのぬるぬる感を楽しんでいた。

### ○Y児の学び

- ・黒土はかたい。
- ・黒土は水をつけるとぬるぬるする。

#### 事例8-②「きゃっ、冷たい！」

7月5日（火）

Y児、P児、U児らが、それぞれ泥団子をつくっていた。

P児 「よし、完成！」

Y児 「びかぴかだあ」

3人はできあがった泥団子をゲームボックスの上に置いた。

P児 「手、洗ってこよう」

Y児 「うん」

3人は水を張った大型水槽に手を洗いに行った。洗っているうちに水のかけ合いになり、ついにP児がその水槽に飛び込んだ。続いてY児、U児と、次々に水槽に飛び込んだ。

P児 「ジャンプしたら面白いよ」

Y児 「ようし、ジャンプ！ きゃっ、冷たい！」

U児 「きゃっ、きゃっ」

ジャンプしたときの水しぶきが楽しかったようだ。その後もしばらく、水をかけ合ったり、ジャンプをしたりしながら楽しんでいた。



### ○Y児の学び

- ・池の中でジャンプすると、水しぶきがあがって冷たい。
- ・水は冷たくて気持ちいい。
- ・P児は面白いことを考えるなあ。

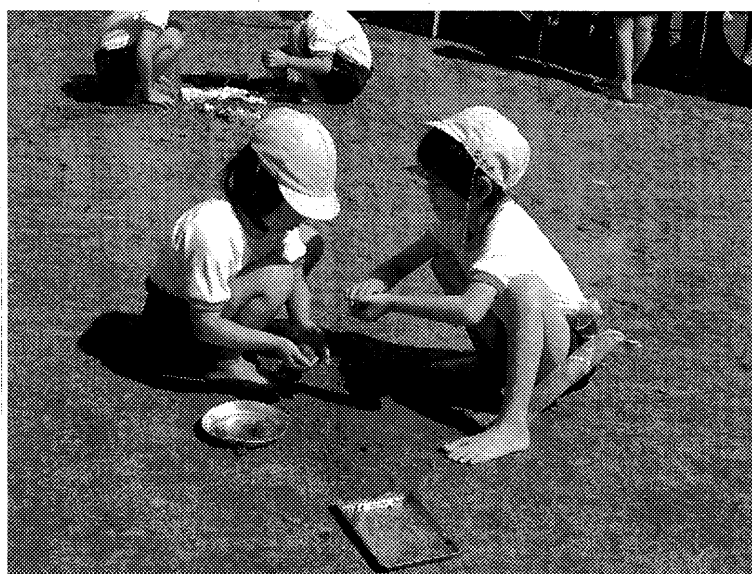
### ○教師の学び

- ・Y児は感じたことを素直に口に出している。
- ・Y児は赤土と黒土を比較することを経験している。
- ・Y児は教師や友達の誘いかけに素直に応じている。
- ・Y児は友達につられて体が動くようになってきた。

- ・ P児と一緒につられていろいろな経験をしている。
- ・ 裸足だったからこそ、すぐに水の中に入れたと思われる。

#### ○今後に向けて

今後も友達と一緒に遊びを楽しむことをたっぷり経験させることが大切である。友達との絆をしっかりと結び、安心して園生活を送ることが出来るようにしていく。この先対峙することも経験すると思われるが、そこを教師がフォローしたり、どうするか考えさせたりしながら、援助していきたい。



## ～Ｙ児の事例を通して見えてきたこと～

### (1) 「学び」について

事例を通して出てきた「学び」を以下のように分類してみた。

#### 〈教師、母親とのかかわり〉

- ・母親がいると心配ない。(事例1)
- ・母親がいると砂場で遊ぶことができる。(事例1)
- ・お母さんが好きなことを教師も認めてくれている。(事例2)
- ・H教師と一緒に遊んだら楽しい。(事例3)
- ・H教師は私を守ってくれるから安心だ。(事例3)
- ・先生がボールを転がしてくれてうれしかった。(事例4)
- ・先生も一緒に猫になってくれてうれしい。(事例5)
- ・先生ネコは寝相が悪いなあ。(事例5)

#### 〈友達とのかかわり〉

- ・Ｑ児は教師が「やめて」って言っているのに止めないダメな子だ。(事例2)
- ・Ｑ児は嫌なことをする怖い子だ。(事例2)
- ・H教師と一緒に遊んでいたら友達もかかわってくる(事例3)
- ・教師や友達と一緒に遊ぶときには痛い思いをするときもあるが、少しぐらいのことは我慢できる。(事例3)
- ・友達と一緒に遊んだら楽しい。(事例4)
- ・先生や友達と体をくっつけて遊ぶと楽しい。(事例5)
- ・W児はカタツムリの気持ちを考えているよ。(事例7)
- ・P児は面白いことを考えるなあ。(事例8-②)

#### 〈自然とのかかわり〉

- ・裸足で地面(砂の上)を歩くとチクチクする。(事例6)
- ・草はくすぐったいなあ。(事例6)
- ・踏みつけられた草の上はフカフカして気持ちいいなあ。(事例6)
- ・草の上を裸足で走っても平気だ。(事例6)
- ・黒土はかたい。(事例8-①)
- ・黒土は水をつけるとぬるぬるする。(事例8-①)
- ・池の中でジャンプすると、水しぶきがあがって冷たい。(事例8-②)
- ・水は冷たくて気持ちいい。(事例8-②)

#### 〈生き物とのかかわり〉

- ・カタツムリは水気のあるところを歩く。(事例7)
- ・カタツムリは触るとキュッとちぢまる。(事例7)
- ・カタツムリの体はぬるぬるしている。(事例7)
- ・カタツムリは段ボールのへりのような場所でも落ちずに歩ける(事例7)

このように分類してみると、〈自然や生き物とのかかわり〉での「学び」の内容が「からだで感じて学ぶ」ことにぴったり来るのではないかということが見えてきた。自然や生き物と触れ合うことが、目(視覚)や耳(聴覚)、手足(触覚)といった“五感”を通して感じる「学び」のチャンスを大きく広げているのではないかと考えている。

## (2) Y児について

### ○安心感をもつこと

母親が近くにいないと遊ぶことができなかったり（事例1）、教師が側にいないと不安になったりしていたY児（事例2）に、友達と同じように自分もやってみようという気持ちが事例3では出てきた。それは教師とのつながりや信頼関係ができてきたからだと思われる。事例4以降は、Y児が友達と一緒に遊ぶ姿が多く見られるようになってきた。そこには気を許せる友達の存在が大きく影響をしている。友達や教師とのつながりができ、安心感をもって園生活を送っているからこそ、Y児は主体的にいろいろなものにかかわったり、いろいろなことをやってみたりすることができるようになった（事例6、7、8）と捉えている。

また、友達に対して、事例2では友達の行為や思いを受け入れられなかったのが、事例7、8では受け入れられるようになってきた。事例3、4、5で友達や教師と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができたおかげだと思われる。友達と一緒にいると楽しいという気持ちや安心感をもつことができたのだろう。

さらに、言葉に関しても、事例3までは、ていねいな言葉遣いでかかわるようなことが多かったが、徐々に自分の思いを自分の言葉で素直に口に出せるようになってきた。そのことも、素直に感じるためには大切なことであると思われる。これも、安心感をもっているからこそ、自然な、素直な言葉が出てくるのであろう。

このように、主体的な学びを保障するためには、まず幼児自身が教師や友達とのつながりを感じながら、安心感をもって園生活を送ることが大切であるといえる。また、Y児にとっては、安心感をもったことそのものも「学び」として捉えている。

### ○直接体験の大切さ

事例3で、Y児は教師の言葉かけによってやってみようという気持ちを持ち、やってみた。しかし、やってみて痛い思いをした後や事例4では、楽しそうな雰囲気を感じてその場にはいたが、実際にやってみることはしていなかった。それが、事例5からは、自分で実際にやってみるようになってきた。事例5は教師の真似をしたりじゃれあったりして自分から動いている。さらに、事例6や7においては、自分で試してみる姿が見られるようになってきた。自分でやってみることで、心から不思議と感じたり、びっくりしたりしている。自分で直接体験することで、五感を通していろいろなことを感じているといえる。

### ○今後に向けて

この一年間、Y児は直接体験する中で、いろいろなことを学んできた。特に、友達と一緒に遊ぶ中で、たくさんの学びがあった。今後も友達と一緒に遊びを楽しむことをたっぷり経験させることが大切であると考えている。